

# 教団における大学の意義

——その原理としての本願抑止——

曾 我 量 深

## 一

今日、十月十三日は、本学の開校記念日でございます。本学の歴史は、随分、古いのでありまして、その始めは、高倉学寮の時代に遡るのであります。

明治時代になりましてから、常在所化制度というものが定められました。それまでは、夏安居というものが百か日それから、秋安居というものが一か月ばかりあったのでありますけれども、それが、常在所化というて、一年中、学問研究をするというような制度になったのであります。その時に、常在所化であられた人は、私どもは、ただ話に聞いているのでありますが、斉藤唯信先生——、あの方は常在所化の一人であった、と、こう承っておるのであります。

その後、時代の進歩に伴うて、学校制度というものが、いろいろ出来上ってきた。それで、専門に仏教の学問をす

るのを専門部と称した。それから、それに対して、さらに広く一般の学問までも手を拡げていく道をば、兼学部と称しておった。つまり、専門部と兼学部と、このような二つの道に分れておった。

そのうち、兼学部の方は、みなさんも聞いておられるでありましょうけれども、京都府に唯一の中学校があつた。

まあ日本中に中学校というものが出来ることになっておつたのでしようけれども、実際に中学校のあるのは、京都とか、あるいは東京とか大阪というようなところだけであつた。で、京都の中学校は、なかなか維持が困難である。たった一つの中学校の維持が困難であるというようなことは、ちょっと今の時代には考えられないことでありますけれども、事実、維持困難でありまして、それで、その時の京都府知事が、東本願寺へわざわざ見えまして「あなたの方にも兼学部というものがあつて、広く世間一般の学問研究をしておられると承っておるのである。ところが、府立の中学校の維持がなかなか出来ない。ですから、暫く二三年の間、あなたの方の兼学部というものを府立の中学に合併して、そうして府立の中学校を、当分の間、東本願寺でお引き受けしていただきたい」。そういうことを京都府知事が東本願寺へ願ひ出られた。

それで、東本願寺の方では、いろいろ評定したのであります。「まあ、東本願寺の方では兼学部というものを作っておるけれども、どうも充分なことができない。これは好い機会であるから、京都府の中学校をお引き受けして、そうして、宗門の中の学生も京都府の中学校の生徒として、一緒になって勉強したならば、生徒も完全な教育を受けることができるようになるだろう」。そういうように評議一決して、そうして京都府の中学校を東本願寺がお引き受けした、と、こういうようなことがあつたのでございます。

そうして、兼学部は、京都府の中学校と一緒にしたのでありますけれども、いつまでも東本願寺のお世話になっておるわけにいかぬ。それで、京都府の中学校は、また、もとのように独立した。それで、東本願寺の方では、京都府の中学から別れて、大谷中学校というものを建てた。

この府立中学校をお引き受けした時には、京都府からの依頼もありまして、清沢満之先生が、合併したところの中学校の校長になられた。その後、稲葉昌丸先生が、東京大学の医学部を卒業せられたので、それで、校長は稲葉昌丸先生に譲って、清沢満之先生は、平教員となって、自らも学問をし、また教育にも従事しておられたわけであります。そういうようなわけで、兼学部というのが中学校になった。そして、専門部というものが、その後、大学寮になった。それから、沢柳政太郎先生の研究の結果として、大学寮中学寮という制度が出来たのであります。

大学寮では、学長を学監と称しておった。私が、はじめて京都にまいりました時には、いわゆる学長に当りますところの学監が二人おられた。一人は、愛知県の方で楠潜竜という講師がおられた。それから、もう一人、九州の細川千巖という講師があつた。細川千巖というお方と、楠潜竜というお方と、この二人が学監であつた。そうして、二人が一年交替で、当番学監というものになっておられた。そういう制度になっておったのであります。

それは、まあ、学校制度が、まだ完備しない時であつたと思ふのであります。私のはじめて来た時は、そのようになっておつたようですが、大学寮・中学寮という制度が出来ましてからは、楠潜竜というお方は、なくなられたものでありますから、細川千巖というお方が大学寮の学監の地位に就いておられたようであります。それで、いわゆる専門部と中学校との二つの道があるのを合流して、中学寮と大学寮というものを作つたのでありますからして、この大学寮・中学寮には、第一部と第二部というものがあつたようであります。もとの専門部から来た人をは第一部とした。それから、中学校の方から来た人をは第二部とした。それは、暫く便宜上そうしたのでありまして、その後、一部・二部を合併して一つにしたのであります。

## 二

大学寮には、安居というものがあつた。今も安居がありますが、学校の制度では、とにかく安居というものが

非常に重要なものである。こういうので、大学寮の中には、安居と、それから、いわゆる学校と、二つが同居しておった。そういうようなことから、やがて、さまざまの問題が起ってくるわけでありす。その後、安居だけが大学寮となつて、学校制度の方は真宗大学と称した。「寮」を取つてしまつて真宗大学とした。それから、中学寮の方も、真宗中学という名前にいたしました。それが暫く続いておったわけでありす。

それで、あの頃、中学の方は、新しい立派な校舎が出来ておったわけでありすけれども、大学の方は、安居と同居しておつて、今の高倉の六条通りのあの高倉会館のあるところ、そこに真宗大学は、安居の大学寮と同居しておつたのであります。

安居の方は、名前は大学寮というけれども、それだけではどうも不充分だということで、老学者先生たちは、そこに宗学専攻院というものを建てた。ずっと後になってから、宗学院というものが出来ましたが、あの宗学院なるものは昔、明治時代に、老学者たちが、宗学専攻院というものを作つた。そういう宗学専攻院的な思想が、大谷大学が出来た後にも、やはり残つておつて、そうして、宗学院というものが出来た。だからして、宗学専攻院的な思想というのは、非常に根強いものであります。

この宗学専攻院的な思想というものは、ずっと明治・大正、それから昭和の第二次大戦の殆んど末期の頃まで続いておつて、いろいろの異安心問題というものを起してきた。そうして、常に新しい思想といひますか、広く仏教やあるいは親鸞聖人の教えというものをば、学問の立場でもって純粋に研究しようというものをば、阻む。そういう思想の学者をば、異端者として排除した。

そのために、大谷大学が出来ても、さまざまの影響を受けて、なかなか進んでいかない。つまり、いつてみれば大谷大学は、長い間、退歩しておつた。こういうような原因が、そういうところにあつたのである。まあ、この頃は、そういうものがなくなつたようだけれども、全くなくなつてもうたというわけにはいかぬと思うのであります。い

ろいろ形が変わって、そうして、我々の学園に対して、さまざまな迫害をしている。それは、すべて、この明治時代の宗学専攻院的な思想が、ずっと今も残っているからであると思うのであります。

### 三

さて、この十月十三日が、わが大谷大学の開校記念日であります。これは、いまでも申しましたように、大学には長い間、学校らしい校舎というものがなかった。昔の大学寮の貫練講堂、今は高倉会館。あの高倉会館には、「貫練堂」という額が掲っております。あれは、昔の高倉学寮の講堂の名前であります。

貫練という名前は、『大無量寿經』の序分の中に「貫綜縷練」という言葉がございますが、その貫綜の貫の字と、縷練の練の字を取って、そうして貫練堂と称した。これは、我らの祖先の方々が、あそこで学問研究をされた、たつと道場である、そういうことを私は、あの貫練講堂に入りますときに、いつも昔のことを思いしのぶわけでございます。

それで、清沢滴之先生が、学校を東京へ移転された。その時に、はじめて新しい大学の校舎が建ったのであります。さきにもいいましたが、私が来た頃の宗門大学は、学長であるべき学監が二人もおられた。それは、いろいろな事情があつて、そういうようにしなければならぬことになっておった。それから、私どもは、京都の学校を卒業したのであります。私どもが卒業しますときには、いわゆる学監はおられなかった。学監はおらずに、その下におるべき主監という職務の方がおられました。主監が、学監代理をしておられるというような状態であります。そういうので、私どもが卒業しますときには、ただ真宗大学という名前の卒業証書をもらった。学監はおられなかった。つまり学監がおられなくても差支えないような内容の学校だったのであります。

それで、学校が東京に移ったときに、はじめて新しい大学校舎が出来て、そうして、清沢先生が初代の学監にな

られた。それが、明治三十四年の十月十三日でございます。それで、その日を記念して、十月十三日をもって本学の開校記念日と定められたわけでございます。

明治三十四年の頃、とにかく学校が東京へ移転して、そうして、清沢先生を学監にいただいた。京都の六条にあったものが、東京の巢鴨の高台に、今から考えれば、お粗末な校舎で、別に立派な校舎というほどのものではないですけれども、とにかく新しい校舎が出来た。こういうので、我々は、心を新たにしましたわけでございます。

#### 四

その時の東京と申しますのは、私どもが参りました時には、電車というものがなかった。乗物としては、鉄道馬車というものがあった。その鉄道馬車が、浅草の公園から、神田、日本橋、京橋を通って、そうして新橋でありますからそれから更に延びて品川まででありますか、よく覚えておりませんが、とにかく、その間には鉄道馬車が走っておった。で、私どもの子供の頃には、東京には鉄道馬車があるということを誇りにしておった。

けれども、鉄道馬車があると聞きますというと、ただ、そういうものがあるのか、というだけのことでありますけれども、やはり生きておる馬でありますからして、道路が不潔になることが想像できるわけであります。とにかく銀座の大通りに馬車が通っておるのでありますから、それを想像してみると、大体まあ、その頃の東京とはどういうところであつたかということがわかるわけであります。

それから、私どもが東京へ行きましてから、二三年経ってから、はじめて三つの会社が別々に線路を敷いた。それを東京市が買い取って、東京市電というものにしたのは、二三年後のことだと思っております。また、いまある山手線は、その時分は郊外線でありました。日暮里、田端、巢鴨、大塚、それから新宿——みな郊外であります。新宿も品川も、みな郊外、郡部であります。だから、あの山手線というものも、私どもの学校が東京へ移ってから、一三三

年して出来た。山手線は郊外線であった。そういうようなわけでございます。

それで、真宗大学の建った場所というのは、四方みな畠でございます。四方畠で、冬になりますというと、空っ風が吹くものでありますからして、校舎の中などは、黄色い埃が入ってくる。窓を閉めておっても、窓の隙間から、黄色い埃が、煙のようになって入ってくる。まあ、そういうようなところに、真宗大学は、明治三十四年から明治四十四年の夏まで、満十年間あったわけであります。清沢先生は、満一年余りで、いろいろの事情もありましたのですが病気がだんだん悪くなられてまして、職をひかれました。その後任は、南条文雄先生がお引き受けくださったわけでございます。

いま申しますように、その頃の東京は、乗物というと、はじめは鉄道馬車であった。それから暫くして、東京市電ができたような状態であります。翻って、京都をみるとというと、電車は早くから出来ておった。いわゆるチンチン電車——明治の終り頃まで、あのチンチン電車だけしかなかった。大正天皇のご即位を記念して、はじめて、今あるような京都市電が敷かれたようなわけであります。

とにかくチンチン電車は、日本最初の電車だと聞いております。単線でありまして、停留所のところだけ複線になっておりました。そうして、少年が電車の案内をしておる。人間が電車の案内をしておった。曲り角へ来るというと少年が、電車の前を走っておって「あぶない、あぶない」と、案内する。それから、単線でありまして、停留所へ来ますというと、よほど長い間、停車しておりました。上京かみきやうの人が汽車に乗るのに「電車で駅まで行こうと思うが」と、こう尋ねますと、「お急ぎでなければ、電車でおいになるがいいでしょう」と。歩いた方が、むしろ早い。電車は、歩くよりもっと遅い。そういうようなチンチン電車が走っておった。親鸞聖人の六百五十回忌の時に、私も参りました時に、依然としてチンチン電車だけが走っておったのを記憶しておるようなわけであります。

京都だけをみて、随分、変わったと思うのでありますが、東京などの変わったことは、明治時代に東京におりま

したことを思うと、殆んど想像も出来ないような変わり方であるといわなければなりません。これは、まあ、ただ物質的な世界だけのことでなしに、精神世界の方にも大きな影響をもつておすることは申すまでもないことだと思つてでございます。

## 五

それで、日本の国の大学の学制というものが、大正の終りに変わった。そうして、単科大学の制度が出来た。単科大学の制度が出来ないという、私学などは、大学に昇格することが出来ない。経費がないものだから、出来ない。単科大学の制度が出来たので、はじめて私立の大学が出来るようになった。その時、我らの、いわゆる宗門大学というものが昇格して、今日の大谷大学になったわけでございます。

で、この大谷大学に昇格した時に、当時の佐々木月樵学長が「本学樹立の精神」という講演をされました。私は、その時、はじめてこの学校へ就任したわけでございます、佐々木月樵学長の「本学樹立の精神」の講演を聴聞したことは、忘れることができないのであります。

佐々木学長の「本学樹立の精神」を読んでみますという、この大谷大学は宗門大学でない、と、こういうておられる。昇格以前の大学は、宗門大学に間違いない。けれども、昇格した大谷大学は、宗門大学ではない。超宗門大学である。こういうに佐々木学長は考えておられた、ということだけは間違いない。その後、いつの間にやら、また宗門大学になってしまった。どうして宗門大学になったかという、宗門の寺院以外の人も前から少しは入ってあったけれども、だんだんそういう人が入らなくなった。

大谷大学は、宗門が経営する大学であるけれども、いわゆる宗門大学ではない。日本の国の大学制度というものに従つて、宗門が経営しておる大学である。だから、仏教の学問をするけれども、宗門から仏教の学問を一般の社会に



開放した。そういうことになっておるといことを、佐々木学長がいうておられる。まあ、佐々木さんは、おとなしい遠慮深い方でありますから、スバスバものをいっておられませんか。けれども、この大谷大学は宗門大学ではないということだけは、はっきりしておる。宗門が経営しておるから宗門大学というても差支えないかも知れぬが、宗門が経営する方針というものは、ただ宗門大学として経営しておるわけではない。

今まで長い間、閉鎖されておった宗門を開放していこう——と。宗門自らを開放していく道を開くためには、まず大学を開放しなければならぬ。こういう方針で大谷大学を樹立した。こういうことを、佐々木学長は「本学樹立の精神」の中で述べておられる。これは、よく読めばはっきりしておる。長い間、宗門は閉鎖的であった。何もかも閉鎖的である。その閉鎖的な宗門が、大谷大学を経営しておる。それだから、頭の切り換えが充分でない。それで、大谷大学を経営していくことによって、宗門自身が頭の切り換えをしていかなければならない。それが、うまくいかないでしょう。そのために、いろいろの問題が起ったのだと思います。今でも、そういうものが形を変えて続いているのではないかと思うわけであります。

## 六

ところで、第十八の本願をみますというと、「唯除五逆誹謗正法」とあります。昔から、抑止の文と称する言葉であります。これを文字どおり解釈すれば、閉鎖的な本願であります。けれども、これは、曇鸞大師から善導大師を経て、閉鎖的なものではないということが明らかにされておる。いわゆる摂取門、抑止門の二門を立てて本願を解釈する。

そうすると、宗門の内と外というものは、むしろ反対になる。内という方がむしろ外になって、外とっておる方が本当の内である。それがわからんで、内と外を文字どおりしておくならば、第十八願の浄土というものは、親鸞

聖人の批判をもってするならば、真実報土ではなくて、方便化土というものになる。たとえば、指方立相などということを知るといふと、どうもはつきりしない。これが真実報土だと考えられない。ああいう話を聞くと方便化土だと考える。これは、内と外とを転換したのでしょう。つまり、本願の文字で外になっておるものが本当の内なのであって、本願の文字で内だと考えられておるものが、本当は外なのでしょう。いわゆる内の世界は有限のもの、それに対して、いわゆる外こそ、本当に無限の世界なのでしょう。

だから、内と考えておるものは方便化土である。むしろ、外のところは真実報土がある、内と外と転換していく。こうすることによって、はじめて第十八願というものが正しく解釈される。そうして、親鸞聖人の『教行信証』におけるところの真仮分判というものが、はじめて正しく領解することができるとでございます。

ところが、今の宗門というものは、みな、いろいろ心配しておられるのでありましょうが――、私も宗門に属する一人でありますし、個人としては随分親しきをもっておる人も宗門の中にはおられますから、それらの人の心を領解出来ないわけでもない。出来ないわけでもないけれども、どうも、何というても、今日でいえば、いわゆる宗派仏教――『教行信証』をみるといふと、宗派仏教などない筈なんです。ない筈なんですけれども、今日、親鸞聖人の教えを伝えておるところの教団というものは、いくら何といふ訳を試みても、宗派仏教である。

もっとも、宗と派とは違うんだらう――と。宗というものは開放的であって、派というものが閉鎖的なのであるとこういふように、宗と派と分けて解釈することもできる。解釈では、宗と派とを分けることができるけれども、しかし、事実になると、宗と派とが一つになっておるようであります。

だからして、あの第十八願を文字どおり解釈すれば、真実報土は出てこない。方便化土になってしまふ。それでは真実報土とはどういふものであるか。真実報土というものは、本願から漏れたものである。本願から漏れたもの、本願の外の方に真実報土がある。そういうふうを考える。本願の内と外と転換しておるのである。

そのように転換させたのが親鸞聖人である。法然上人までは転換しなかったのでありましょう。だから、法然上人には真仮分判ということはない。親鸞聖人が真仮分判をされたということは、これは内外を転換したのである。内外転換しなければ、真仮分判はできない。内外を転換する。そこまでいかぬというと、『教行信証』というものが、本当に領解できないと私は思うのであります。

## 七

今の宗門の人も、そういうところに、いろいろ苦勞をしておられるのでしょう。が、たとえば、こういうことをいう人があります。それは、大谷大学の学生の数を減らす、四百人位に学生の数を減らすという。いわゆる宗門外の人には、出来るだけ入ってもらわぬ方がいい、宗門の中の人だけ入る学校にする、と、こういうようなことをいうておる人がある。けれども、はじめから四百人にすれば、そのうち四百人も志願者がこないようになる。そして、四百人の定員を三百人に減らし、三百人を二百人に減らし、しまいには百人になってしまふ。英才教育というけれども、その英才が入ってこなければどうするか。そういうことがわかる人もあるようだけれども、そういうことのわからぬ人も沢山あるようであります。非常に歎かわしいことではないかと思ひます。

この頃は、大谷大学の内容というものが、だんだん世間に知られるようになった。それで、この頃は、いわゆる宗門の外の人が沢山入ってくる。宗門内の人よりも、宗門外の人の方が沢山入ってくるようになった。それで、宗門の内外を転換したらどうなるか。内と外と転換したらどうなるか。

内外転換ということは、内外不二ということを前提して、はじめて内外転換ということができるのである。そうしてみれば、むしろ宗門内の人の方が宗門外になる。自分たちは今まで宗門内だ、と思うておった。これは自分の学校だと思つておったのが、いつの間にか、いわゆる宗門外の人に占領されてしまふ。そして、自分たちは、むしろ宗

門外になってしまふ。そういうことになる、いわゆる宗門人は、少し目を醒ますことができるようになりはしないか。

宗門の内だの外だのというて、宗門外の人を、どうして教育しなければならぬか、と、こういう。そういうことをいう人がいます。そういうことを堂々という人がある。大谷大学は、学生の数を四百人に減らさなければならぬ。そうするというと、教授も、また事務職員も減らさなければならぬ、と、こういう。けれども、そうすれば、学生を減らすよりも、自然に減ってくるようになると思う。四百人にとどめておくというけれども、しまいに百人になってしまう。英才などは、どっかへ逃げていつてしまつて、入つてこないようになる。

今は、英才も入ってくる。鈍才ばかりではなくて、英才も入つてこられるのであります。宗門内からも英才が入ってくるし、それから、宗門外からも、それにまさる英才が入つてこられる。ですから、四百人に減らすというような考えをやめて、少くとも千人以上になければならぬ。この頃は、九百人ほどの学生諸君がおられる。以前は、七百人であつたから、二百人ばかり増えた。

まあ、本学は、校舎が非常に老朽化しておるわけですが、これは、必要があれば、校舎も出来るのであらうと、私は、前から信じておりました。やっぱり時來つて、新しい校舎も出来ることになつたと承つて「なるほどそうだ」と、心から嬉しく思うのでございます。校舎が出来ようになれば、千五百人とか、あるいは二千人数の学生諸君を迎えることができるようになる。そういうことになれば、教職員も減らすというよりも、もっと沢山の人を招聘しなければならないような必要に迫られることになる。

何というても学校には、立派な教授がおられるということが大切であることは、これは申すまでもないのであります。やっぱり学校は、学生諸君を大切にしなければならぬ。学生諸君が大事なんでありまして、宗門の人だけしか入らぬということではいかんと思う。やはり、いわゆる宗門外の人もあるような学校にならなければならぬと

思うのであります。

## 八

私は、宗門の内だの外だのというような距てをもった考えは間違うておると思います。宗門は、国家や社会から、いろいろと思恵を受けておる。恩恵を受けておるから、学校などを経営するときには、これは国家なり社会なりに対する報恩行である——と。宗門は、ただ金を集めるだけでなしに、集めた金を正しく使うていく。まあ、学校の方では、学生諸君から授業料もとらずにお世話をしておるわけではないので、やっぱり、それ相当の授業料を頂戴して、学校を経営しておるわけだから、何も宗門の内だの外だのと、自分の方から閉鎖的にならずに、開放的になつて、そうして、自分たちの宗門が受けたところの恵みを感謝する。その恵みに報いるという精神が大事であると、私は思うのであります。

この頃は、学生諸君の数も、だんだん増えて、そして、女子学生の方も沢山入つてこられた。それは、まあ女子学生亡国論ということもあるのだと聞いておりますけれども、そんな狭い量見ではいけないと思います。

とにかく、まだ、いろいろお話したいことがあるのでございますけれども、あまり長談義をしてもいけないと思います。で、これで、私の話を終ることにいたします。

（本稿は、さる昭和三十九年十月十三日、大谷大学の開学記念式における講演の筆録である、文責 伊東慈明）